

### 今月の題字 大出浩司さん

(特別支援学校・若葉高等学園校長)  
創立者・大出文子先生が描いた「理想の養護教育」を立派に引継いだ浩司先生。さくらもーるでの「わかば生き生きフェア」も20年以上続けています。

# 虹の架橋

### 富弘美術館三十周年記念誌発行

富弘美術館は今年五月十二日に開館三十周年を迎え、それを記念して「富弘美術館開館三十周年記念特別号」が発刊されました。星野富弘さんは一九七〇年六月、中学の体育教師になって間もなく、放課後の部活動で空中回転の指導中に頭部から落下。頸髄損傷で手足の自由を奪われました。負傷から二年後、富弘さんは口で筆をくわえ「ア」という字が初めて書けました。以来、四十九年経ち、詩画という形式の作品を生み出した富弘さんは七五歳になつた今もお元気で活動しています。

記念号では、富弘美術館学芸員の桑原みさ子さんが富弘作品の魅力



「額あじさいが結婚当時の二人の姿であるならば、寄り添うように描かれた水芭蕉の花は今の二人の姿といえよう。作家自身が水芭蕉として描かれ、第三者を見つめている。作家の視点が変化した作品として存在する」と桑原さんは解説しています。富弘美術館三十周年記念企画展は八月二十九日まで開催。美術館のホームページから桑原さんの作品解説ユーチューブもご覧になれます。



いい話 (文責・靖) 《312》

### 逆境の時こそ力を尽くす

小耳にはさんだ  
人間学を学ぶ月刊誌『致知』を二十年以上前から読んでいます。八月号は「積み重ね、積み重ねてもまた積み重ね」というテーマで帝國ホテルの十代目社長・定保英弼さんの記事が載っていました。

帝國ホテルは百三十一年前、「日本資本主義の父」とも称される渋沢栄一翁が初代会長となり、「日本の迎賓館」を目指して創業しました。定保社長は、「去年は創業百三十年の節目の年であり、東京五輪を終えて開業日の十一月三日にはスタッフやお客様と一緒に盛大にお祝いする予定でしたが

### 世界一小さな 定利屋 トイレ美術館

今月の写真《312》  
昭和20年8月2日の大間々祇園

大間々祇園祭は、寛永六年(一六二九)、京都八坂神社からご分霊を勧請し、悪疫退散、五穀豊穡を願って、六月二十四日(現在の八月二日)に御神霊の渡御を行ったのが始まりです。明治十九年にはコレラが大流行し、大間々祇園祭も二ヶ月延期をして実施されました。昭和二十年、敗戦の二週間前の祇園祭の写真も残っています。私達の祖先は多くの試練を乗り越えて大間々祇園祭りを大切に継承してきました。今年も規模を縮小し、八月二日に神輿渡御を行い、三百九十二年の伝統を守る予定です。

一人の担当  
者がお客様の期待にお応えできないければ他でどんな素晴らしいサービスを提供しても信用やブランドを構築するに十年の歳月がかかるけれども、それを失うのはたった十秒。そして再び信用やブランドを取り戻すには十年を要するという「1001」というサービスの教訓となる敷地があります。ドアマンがお客様をお迎えし、チェックアウトをしてお見送りするまでの間、どこかひとつの部門、たった

新型コロナウイルスの影響でお祝いのムードが一転、これまで経験したことのない困難に直面しました」と話しています。定保社長は「逆境の時こそ力を尽くす」という言葉を常々スタッフに伝え、それが帝國ホテルの行動規範になっているそうです。今から十年前の東日本大震災の時、交通機関が麻痺し、帰宅困難となった約二千名もの人たちが帝國ホテルのロビーに溢れました。当時、総支配人だった定保さんはすぐに危機対応の態勢を整えましたが、驚いたことに、上から指示する前に、現場のスタッフたちはロビーに椅子や毛布を出したり、

準備用の飲料水や乾パン、携帯電話の充電器などを用意しました。そして、調理のスタッフたちは避難者の身体を少しでも温められればと考え、震災の翌朝には、避難者全員に野菜スープを振る舞いました。丸十年経った今も「あの時はお世話になりました」という手紙が届くそうです。帝國ホテルには「1001」ではなく、「1001」というサービスの教訓となる敷地があります。ドアマンがおお客様をお迎えし、チェックアウトをしてお見送りするまでの間、どこかひとつの部門、たった

### 靖ちゃん日記

令和三年七月十七日(土)  
四時起床。夜明けが少し遅く、存り明々の明星が美しく見えた。先日の大雨で二日続けて店に水が浸水したため、一週間経って今朝、倒溝の掃除をした。葛の根っこがびっしょりとはびこり、一時間に50センチも進まなかった。腕が疲れた。今日は二度目のワクチン接種。疲れているんだからと家族に止められたが無視した。今回も痛くも痒くもなかった。まだ若いと自信を取り戻した。外へ出るつもりで、SNSに「今年の夏は10%割引クーポンが来ているので夜は家族みんなで食事に行こう。幸せを感じるひと時だった。ワクチン接種の予約も食事事も、買物も乗り物も、スマホがあればOKの時代に存った。家族五人分の食事代をスマホで済ませた。支払いは、PAYPAYでもd払いでもなく、いつも「G(爺)払い」だった。

一人の担当者がお客様の期待にお応えできないければ他でどんな素晴らしいサービスを提供しても信用やブランドを構築するに十年の歳月がかかるけれども、それを失うのはたった十秒。そして再び信用やブランドを取り戻すには十年を要するという「1001」というサービスの教訓となる敷地があります。ドアマンがおお客様をお迎えし、チェックアウトをしてお見送りするまでの間、どこかひとつの部門、たった  
目を閉じて見える景色や虹の足、雨上りの虹を見ると、吉野弘の「虹の足」という詩を思い出します。山路を登るバスの中から見た虹の足の底に、いくつかの家がすっぽり抱かれて染められていました。「おーい、君たちは野面に立った虹の足に見惚れたがバスから見えても村人には見えない。詩の最後は「そんなこともあるのだろう。他人には見えなくても自分には見えない幸福の中で、格別驚きもせず、幸福に生きていくことが」と結ばれています。虹の架橋も「気づかない幸福」に共感できる新聞にしたいです。



第313号は令和三年九月一日(水)発行予定です。